

岡本

勝編

伊勢俳書集

古典文庫

岡本 勝編

伊勢俳書集

古典文庫

古典文庫第四六三冊

昭和六十年四月二十日印刷発行

非売品

編者 岡本 勝

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

伊勢俳書集

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

解題……………岡本 勝…五

伊勢俳諧新発句集 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵……………三三

〔伊勢宮笥〕 神宮文庫蔵……………三九

〔杉のむら立〕 神宮文庫蔵……………二八一

俳諧あふむ石 藤園堂文庫蔵……………三四三

其 暁 愛知県立大学蔵……………三九七

凡 例

1 『伊勢俳書集』として、西尾図書館蔵『伊勢俳諧新発句帳』、神宮文庫蔵『伊勢宮笥』、『杉のむら立』、藤園堂文庫蔵『俳諧あふむ石』、愛知県立大学蔵『其暁』をなるべく原本通り翻字した。

2 漢字・仮名は概ね現行のものとした。但し、「𪛗」「𪛘」など一部の異体字はそのままとした。

3 衍字等原本のあきらかな誤りもそのままとし、右傍に（ママ）と注した。

4 終りに、本書に翻刻をご許可下さった西尾市立図書館、神宮文庫、藤園堂文庫、愛知県立図書館に対して、深謝申し上げる。

なお、本書の原稿作成に早川由美君の助力を得た。

岡 本 勝

解

題

岡

本

勝

一、伊勢俳諧新発句帳

伊勢の地は、内宮長官の荒木田守武が俳諧の鼻祖とされたこともあり、早くから神官を中心とする俳諧が盛んに行われ、多くの伊勢俳書を生んだ。本書の序文に、

抑俳諧の風躰いにしへより他の国と異なりしかるを国の風俗をすて他のなかくれくまんもなけかし又他の風俗をうつしかへんもあやなし柳はみとり花はくれなるなる物をや

と、伊勢俳諧の独自性を強調するのは、その歴史に対する自負に裏打ちされている。本書は、数ある伊勢俳書の中でも、万治二年（一六五九）刊と早い時期のものであるが、「新発句帳」と称するのは、序文に、

詞おほきは品やすくなるらんと人をえらはす独として三十句をかきり漸春夏
殊冬とわかち四冊となし新発句帳と名付るいにし望一勾当集めをかれし大発

句帳あればなるへし

と、杉木望一の『大発句帳』に因んだものという。

『大発句帳』は、『伊勢俳諧大発句帳』のことであるが現存しない。これと関りのある俳書が『伊勢俳諧大発句帳抜書』であるが、その序文によれば、

昔年杉木望一大発句帳の内撰出さむとよりくしるしを付置レ侍るをかいやり捨んはあたらの伊勢俳諧のたねをうしなふにもやあらんと思ひ立ぬ部分其外次第またからねど撰者にあらざればと今更改るに及ばずとまれかくまれ彼草案に任ぬ

と記され、『大発句帳』が望一の撰であること、そして望一にはその『抜書』を作る用意があり、望一の没後、遺志に従って『抜書』二冊が作られたことが分かるのである。

『大発句帳』に因んだ『新発句帳』は、春・夏・秋・冬各部一冊、全四冊という大撰集である。京・大阪・尾張・紀伊など遠国俳人の句も見られるが、その多

くは伊勢山田の俳人の句で、当時の伊勢俳壇の活況がしのばれる。

ところで、当時の伊勢の地は、外宮・内宮の神官を中心とする階級社会であった。本書の撰者は不明であるが、春の部巻頭に外宮長官檜垣常晨をおき、句引きの最初にも常晨をおくなど、外宮中心の社会構造への配慮が見られ、本書が外宮の神官社会を背景とした撰集であったことを思わせる。

更に本書は、「独として三十句をかきり」入集させたというが、三十句という制限いっぱい伊勢山田の入句者は、幸田光延以下十九名という多きに及んでいる。その中には、望一の弟で『伊勢俳諧大発句帳抜書』や『伊勢俳諧長帳』の编者杉木正友も含まれているし、その流れを汲むと思われる正孝・正則の名も見える。あるいは、そのあたりが撰者ではなかったかと思われる。

さて、本書は、西尾図書館岩瀬文庫に一部存するのみの稀覯本である。本書の書誌は次の通り。

中本 四卷四冊。袋綴。

表紙 藍色万字繫牡丹唐草文空押。縦一九・四纏×横一三・七纏。

題簽 闕。

内題 「伊勢俳諧新発句帳」。

柱刻 なし。

行数 八行。

丁数 (春) 四十七丁。(夏) 二十九丁。(秋) 二十九丁。(冬) 三十五丁。

刊記 「万治二己亥年十一月日」。

序文 無署名のものあり。

印記 「石井藏書」「岩瀬文庫」。

二、「伊勢宮笥」

足代弘氏は、伊勢の談林派の中心人物であった。そのことは、本書所収の高向

光如・中田心友両吟百韻に、弘氏が点を加えていることによって知る事ができる。しかし、伊勢の談林時代は、弘氏が俳諧活動を始めた延宝初年から、その没年の天和三年（一六八三）頃までという短い期間にすぎず、従って伊勢の談林俳書も少ないのであるが、延宝六年（一六七九）初春刊の本書は、その第一作というべきもので、同年刊『杉のむら立』と共に、伊勢談林の代表的な俳書といつてよい。

内容は、弘氏・心友両吟百韻、光如・心友両吟百韻、心友・足代弘員・谷貞俱三吟百韻、龍熙快・光如・弘氏三吟百韻を収める。本書には序跋もなく、編者名をも明記しないが、巻頭の百韻において、指導者弘氏の発句に対し心友が脇句を詠んでいること、所収の百韻四巻中三巻に心友が登場することをもって、心友を編者とするのが妥当と考えられる。なお、『誹家大系図』によれば、心友は調和門という。御師として江戸に出る機会が多く、その余暇に調和の教えを受けることになったものかと思われる。

ところで、本書の現存本は全て題簽を失っており、神宮文庫本には「伊勢の通し駕」と墨書されているが、編者と目される心友に『江戸宮笥』の編がある点、又「伊勢の通し駕」なる言葉が連句中に見出されない点などから考えて、通説の「伊勢宮笥」を一応題号としておきたい。

さて、本書は、『国書総目録』によれば、東大図書館竹冷文庫・天理図書館綿屋文庫に蔵されているというが、竹冷文庫本は外題を失った『江戸宮笥』を本書と見誤ったものである。よって、綿屋文庫本以外には底本とした神宮文庫本が存するのみの稀覯本である。書誌は次の通り。

神宮文庫本

半紙本 一冊。袋綴。

表紙 砥粉色無地。縦二三・二糎×横一六・五糎。

題簽 闕（但し、左肩に直に「伊勢の通し駕」と墨書）。

内題 なし。

柱刻 「一（一廿八）」（但し、「八」から「十五」の間は「八・十二・十三・一・九・十・十一・十五」の順となっている。丁付通りでは乱丁となるため、本文の順序に従って配列したものである）。

行数 八行。

丁数 二十八丁（他に首に一丁遊紙）。

刊記 「延宝七乙未年初春旦」。

序跋 なし。

印記 「宮崎文庫」「神宮文庫」。

綿屋文庫本

表紙 砥粉色無地。

題簽 闕。

柱刻 「一（ノ廿八）」（但し、「八」から「十五」の間は「八・九・十・一・十二・十三・十一・十五」となっており、本文が錯乱している）。

なお、『俳書叢刊第七期六』（天理図書館、昭38）に翻刻があるが、丁付「八」から「十五」の間の錯乱はそのままにしている。

三、「杉のむら立」

本書は、『国書総目録』によれば、神宮文庫に一本存するのみの稀覯本である。神宮文庫目録には勿論、「杉のむら立」という書名で収められているのであるが、原本にあたってみると題簽は剥落し、内題もない。但し、題簽剥落あとの上に、いつ頃誰の手になるものか不明であるが、鉛筆で「杉のむら立」と記され、書名のよってききたるところを知ることができるのである。この題号は文庫目録等に記された書名であるとはいえ、鉛筆書きであることなどを考えると、「杉のむら立」をもって正式の題号とにわかに認定することはできない。